

ナチュラル

ある野球の物語

私立吉田高校野球部監督の佐伯吾郎はため息をついた。

「今年も無理かな」

佐伯が監督をつとめている吉田高校野球部は、いつも甲子園の一步手前まではいくのだが、惜しいところで負けてしまう。その原因は佐伯自身にもよく分かっていた。ピッチャーである。

高校野球の厳しい予選を勝ち抜くためには、エース級のピッチャーが少なくともふたりは必要になる。勝ち進んでいくと日程がきつくなり、ピッチャーひとりでは連投させざるをえないので、結局はいいところで打たれてしまうからだ。

おとしは、決勝まで進んだ。大きなチャンスだったが、7回まで無得点に抑えていたエースが、8回につかまった。明らかに疲れが見えていたが、佐伯にはどうしようもなかった。

「こいつにかけるしかない」

しかし、エースは連打を許し逆転を喫した。次の回から、相手はピッチャーを交代してきた。そして、そのピッチャーにあえなく打線は抑えられた。吉田高校の甲子園出場という夢が潰えた瞬間であった。

もちろん、佐伯とて手をこまねいていたわけではない。中学野球やリトルリーグをつぶさに見てまわり有望なピッチャーをスカウトしようとした。しかし、吉田高校には資金力が不足していた。いいところで、他の有望校に有力選手を奪われていった。

今年のエースの柏葉はいまひとつであった。なかなかいい球を投げるのであるが、持久力がない。7回までは好投するが、8回以降に球威が急に落ちて、相手打線に捕まってしまう。佐伯は、柏葉に春から走りこみを命じているが、体力がそう簡単につくものではない。それに、高校生では完全に体ができていないものも多い。無理をさせることはできないのだ。だからこそ、なんとかもう一枚切り札が欲しい。贅沢と言われそうだが、ピッチャーがふたり、これが過酷な予選を勝ち抜く鉄則である。

佐伯にとっての救いは、センターを守らせている山下がピッチャーもこなせるということだ。2回程度であれば、なんとか使えそう。そうは言っても、戦力不足であることは否めない。あとの頼りは、打線である。つまり、少々ピッチャーが打たれても、それ以上の点をとってくれる打線であれば、なんとかなる。今年、打線はいつもより迫力があつた。特に、四番の中田はホームランも打てる。この前の練習試合でも9回に逆転スリーランを放って、チームを勝利に導いた。

佐伯は、みずからバットをもって守備練習を指導していた。まず、内野候補の選手10人をサードの守備につかせて、ファーストへ送球させる練習を繰り返した。

なかなか矢をさすような送球ができる高校生はいない。どうしても山なりの球になるが、正確な送球さえできていれば問題はない。新入部員の 3 人をみながら、佐伯はため息をついた。年々ひ弱になっていく気がする。とは言っても、体はひよろひよろしているが、なかなか野球のテクニクがうまいものも増えている。小さいころから野球をやっているからだ。

佐伯はノックを重ねるうちに腹がたってきた。サードの守備ではない。ファーストの捕球である。簡単な球を落球するのだ。一塁の守備にはレギュラーの 3 年生である高橋をつかしている。あんな球を捕れないのでは、一年生に示しがつかない。佐伯は気合をいれた。

「ファーストしっかりいこう」

ファーストの高橋は手を挙げてこたえたが、それでも、その後も落球は続いた。みると、落球するたびに首をかしげている。

「あいつはどうしたんだ」

見るに見かねた佐伯は高橋を呼んだ。

「いったいどうした。お前らしくないぞ」

すると高橋は変なことを言った。

「ひとりだけ、まっすぐ飛んでくるのに、しっかりミットに収まらないやつがいるんです」

「なんだそれは？」

「あいつですよ。一年の堀場です」

「堀場？」

佐伯は新入生の堀場をみた。背は高いが、やせ細っている。それに中学野球では万年補欠だったはずだ。よほど鍛えないと、高校では通用しないと思っていた。

「ええ、あいつが投げる球だけうまく捕れないのです」

佐伯は高橋の気のせいではないかと思った。それほど速い送球ではない。みるからに平凡だ。

ためしに、佐伯はファーストを控えの 2 年の木下に変えてみた。すると、驚いたことに、木下も落球したのだ。確かに、堀場の送球の時だけ落球している。しかも、木下は、自分がなぜ落球したのか分からない様子で、しきりと首を傾げている。

佐伯は自分で確かめることにした。

「木下ちょっとかわってくれ」

そしてノックバットを高橋に渡した。

「高橋、ノックはできるな」

高橋はうなずいて、ノックを続けた。佐伯がファーストについたので、悪送球してはいけないとみな緊張気味だ。丁寧に送球してくる。

そして、堀場の番になった。背が高いので、守備が窮屈そうだ。堀場は、それでもゴロを捕球すると、佐伯に向かってゆっくりと送球した。何も変わった様子はいみえない。球も

それほど速くもなく平凡だ。

「なんで、こんな球がとれないんだ」

そう思って、佐伯は堀場の送球を捕球しようとした。すると、真ん中で捕球したはずの球がミットの土手にあたって、こぼれ落ちた。

佐伯は首を傾げた。

「どうなっているんだ」

佐伯は堀場を呼んだ。いきなり監督に呼ばれて、堀場はかなり緊張している。

「ちょっと一緒にキャッチボールをしないか」

佐伯は、堀場とキャッチボールをはじめた。まずはウォーミングアップからだ。5m程度の距離でボールを投げあった。特に変わったところはない。佐伯は、徐々に距離を拡げていった。そして、ある距離をすぎたところで、急に堀場のボールが捕りにくくなることに気づいた。

佐伯は再び距離を縮めた。すると、普通にキャッチボールができる。

「堀場、ありがとう」

佐伯は堀場を解放した。そして、佐伯は考えた。

「こんなことは自分の野球人生ではじめてだ」

つぎの日、佐伯は堀場を呼んだ。

「バッティングピッチャーをしてみてください」

堀場はとまどっている。いままで、そんなことを言われたことがないからだ。

他の野球部員も

「どうしてあいつなんだ」

という顔をしている。あんな平凡な球を投げる新生に監督はなにを考えているのだろうか。

佐伯は命じた。

「まずはウォーミングアップからだ」

堀場は、20球ほど投げた。すると、キャッチャーが時折、首を傾げながら落球している。

「よーし、それじゃバッティングに入れ」

中田にそう命じると、佐伯はキャッチャーの後ろに立って、堀場の投球をみた。ピッチャーの経験がないので、フォームはばらばらだ。

最初の球は、平凡だった。堀場は先輩にぶつけてはいけないと思ってか、手加減をして投げている。中田は、面白いように豪快なあたりを飛ばした。それから、しばらくは中田の一人舞台が続いた。白球は面白いように外野フェンスを越えていく。

野球部員たちは、みな、これはいいバッティングピッチャーだと思った。フォームはぎこちないが、コントロールは良さそうだ。打者に自信をつけさせるには絶好の相手だ。

すると、佐伯は堀場に向かって
「思いっきり投げてみる」

と言った。

堀場はしかたなく、手加減することをやめて思いっきり振りかぶって投げた。とは言っても、手から放たれたボールは時速 120km もない。好打者の中田にとっては、かえって絶好球である。

中田は、にやっと笑うとバットを思いっきり振った。本人も、みんなもスタンド入りを確信したが、ぼてぼてのゴロが内野に転がった。

それからの光景は、野球部員には信じられなかった。誰でも打てそうな球を、中田はことごとく当たりそこねのゴロにした。しかも、完全に芯をはずれている。

しだいに中田も向きになってきたが、結果は同じだった。見かねた佐伯が言った。

「もういいだろう」

中田は、納得がいかない。

佐伯が別の野手にバッティングピッチャーを命じると、先ほどまでの不振がうそのように、中田のバットから快音が生まれた。ほとんどの打球が外野フェンスを越えていく。中田はふたたび自信を取り戻したようだ。

練習後に佐伯は中田を呼んだ。

「堀場の球はどうだった」

「ええ、見たところでは本当に平凡な球なんです。なんで自分が打ち損じたのか分かりません」

「俺も最初は不思議だった」

「監督はなにか気づいたのですか」

「ああ、あいつの球は、ベースの直前でわずかに変化している」

「本当ですか」

「ああ、変化する場所があまりにも近いので、捕球するときやバッティングの時には分からない。ただ、じっと近くまで球を追っていると、その変化にきづく」

中田は驚いた顔をしている。

「いいか、バッターは、自分のバットに球があたる瞬間まで球を見ているわけじゃない。ある程度近づいたところで、勘で振りぬいているんだ」

中田は納得した。

「だから、お前は完全に芯でとらえたと思っていたが、微妙にずれていたんだ」

「そうだったんですか」

「そして、あせればあせるほど早打ちになる。だから、よけい当たらなくなる」

ここで、佐伯はひらめいた。

「こいつは使えるかもしれない」

そして、つぎの日から堀場にピッチング練習をさせた。主として、ランナーが出たときのセットアップを教え込んだ。牽制を含めて、ボークをしないための注意や、ファーストのカバリングなどを徹底して訓練した。堀場は内野手しかやったことがなかったため、はじめは戸惑っていたようだが、しだいに様になってきた。

「監督、わたしのような球威のない球ではピッチャーはつとまらないのではないのでしょうか」

「大丈夫、俺を信じろ」

佐伯は堀場にそう言った。

吉田高校は予選大会に入る前に最後の練習試合を行った。相手は、強豪の西院高校だ。両方ともシード校であるので、順調に勝ち抜けば準決勝であたる相手である。佐伯は、なんとか練習試合で勝利をおさめ、選手に自信をつけさせておきたかった。

試合は、先発の柏葉と四番の中田の活躍で、8回まで3対0とリードした。しかし、急に球威の衰えた柏葉が8回につかまり、3対2と迫られた。そして、1点リードのまま迎えた9回裏にドラマは起きた。

続投の柏葉は、何とかワンアウトをとったが、連打で1,2塁にランナーを背負った。たまたま、佐伯はセンターの山下に交代した。すると、相手はセオリーどおりにバンドでランナーを進塁させた。

佐伯は舌打ちした。いまはバンドがみえみえではないか。相手は2番打者である。胸元にボールを投げてけん制するとか、工夫があるだろう。でもバッテリーには余裕がなさそうだ。

西院高校は絶好の打順で、3番4番と続く。一打逆転のチャンスである。

3番打者は、これみよがしに力強い素振りを山下に見せた。空気を切る音がベンチまで聞こえる。みると、山下は完全にびびっている。佐伯は伝令を走らせた。

「思いっきり投げろ」

しかし、山下は明らかに逃げの投球で、フォアボールを出した。球威もまったくない。普段の投球ができれば大丈夫なはずなのだが、どうも気が小さいようだ。

佐伯は思い切った賭けに出た。

「ピッチャー交代！」

そして堀場を呼んだ。

相手のベンチはおやっというように佐伯をみた。堀場のデータはまだ相手には伝わっていない。ベンチのなかでざわめきが聞こえる。

堀場は、完全に緊張している。佐伯は普段どおり投げれば大丈夫と肩をたたいた。とは言っても、いきなり満塁のピンチで、相手は四番打者である。緊張しないほうがおかしい。しかも、一打出れば逆転サヨナラである。

そんな場面で出てきたのだ。相手も、この新人は秘密兵器かといぶかっている。どんな

剛速球を投げるのだろうか。しかし、堀場がウォーミングアップを開始したとたん、それは失笑に変わった。あんな球威では抑えられるはずがない。

そして、いよいよ勝負の第一球が放たれた。

その球は、ど真ん中に打ちごろのスピードで打者に向かっていった。思わず、四番は笑った。吉田高校の野手は、思わず目を瞑った。逆転満塁ホームラン。みんながそう思った。練習試合とはいえ、そうあるチャンスではない。

しかし、渾身の力で振ったバットは芯をはずれた。誰もが快音を期待したが、ぼてぼてのボールが三塁側に転がった。堀場はマウンドからすばやくかけおりて捕球すると一塁に送球した。

「やったー！」

吉田高校のナインは小躍りした。これでゲームセットだ。ところが、そのなんでもない送球を一塁の高橋が落球してしまった。ツーアウトであったので、二塁ランナーまでが生還し、吉田高校はあえなく逆転負けを喫した。西院高校のナインは大喜びである。あえなく負けと思った試合が逆転勝ちとなったのだ。しかし、監督の西村だけではじっと堀場を見ていた。

負け試合ではあったが、佐伯には大きな収穫がふたつあった。ひとつは堀場がピッチャーとして使えるという目途がついたこと。そして、もうひとつは堀場の送球のことまで自分が気をまわしていなかったということだ。うかつと言えばそれまでだが、これは大事なことだ。堀場の球は打者も打ちにくい、それはファーストも落球しやすいということになる。さらにいえば、キャッチャーも捕球しにくいということになる。その対策を考えないかぎり、堀場をピッチャーとして使うことはできない。

佐伯はキャッチャーの飯田を呼んだ。

「堀場の球はどうだ」

「不思議ですね」

「不思議？」

「ええ、微妙に変化するのですが、それがどちらに変化するのか予想不可能なのです」

佐伯は驚いた。そこまでは気がつかなかった。当然ある規則性があると思っていたからだ。すると飯田はこういった。

「もし、変化する方向が決まっていれば、わたしもミットを動かして対応できます。でも、堀場の球には、それが効かないのです」

佐伯は悩んだ。これでは対応のしようがない。

「でも、監督、なんとかあります」

飯田は断言した。

「どうするんだ」

「さいわい、堀場の球は球威がそれほどありません。だったら、自分の腹を使います」

「腹で？」

「ええ、ミットを下に構えて、腹と一緒に押さえ込みます」

「大丈夫か」

「大丈夫です。試しましたが、うまくいきました」

佐伯は感心した。高校生なりに工夫しているのだ。そして、もし飯田の話が本当ならば、キャッチャーの捕球の問題はクリアできることになる。

「本当に大丈夫か」

すると飯田は笑って

「腹筋を鍛えますよ」

と言って、ユニフォームをまくと、腹をみせた。

「監督、僕も勝ちたいです。そして甲子園に行きましょう。堀場は宝ですよ」

佐伯は思った。こいつらを甲子園に連れて行く。今年は最大のチャンスかもしれない。

監督室に呼ばれた堀場は恐縮していた。

「監督すいません。僕のせいで負けてしまいました」

堀場は、最後の送球は自分のエラーと思っているようだ。

「堀場、ちょっと手をみせてくれ」

佐伯は、思い切ったようにそう言った。佐伯には気になっていたことがあった。しかし、選手の身体的な特徴を監督が強勢して見ることはできない。それでも佐伯はどうしても確かめたかった。

堀場は素直に手を出した。

佐伯は驚いた。堀場の指はとても長い。しかも、人差し指が中指と同じくらいの長さだった。いや、むしろ少し長いかもしれない。これが、堀場の球がゆれる原因だったのだ。自然の変化球。まさに伝説のナチュラルだ。

堀場は不安そうに監督を見ている。

「やはり、この手が原因でエラーしたのでしょうか」

「なんだ。堀場は気づいていたのか」

「ええ、小さい頃から父とキャッチボールしていましたから。最初は父も不思議がっていましたが、この手の指をみて気づいたようです」

「そうなのか」

「ただし、野手にとっては致命的な欠陥だから、人には話すなと言われていました」

佐伯は堀場を見た。悩んでいたのかなと思うと気の毒に思った。そして、意を決したように言った。

「堀場、これは欠陥じゃない。宝だよ。野球の神様が堀場にくれた宝だ」

堀場は意外といった顔で佐伯を見ている。佐伯の言っている意味が分からないようだ。

「俺に任せろ」

と肩に手をやった。

次の日から、佐伯は堀場にカーブの投げ方を教えた。堀場は、最初はどうもできなかつたが、すぐに覚えた。

「いいか、ファーストに投げるときは、カーブにしろ」

「ファーストにカーブですか」

「ああ、それなら高橋も捕球できる」

それが、佐伯の出した結論であった。まっすぐを投げようとする、堀場のボールは回転がほとんどないので、ナチュラルな変化が生じる。これでは、野手も予測できない。しかし、意識的にカーブを投げれば、ボールの回転がある方向に定まる。そうすれば、捕球する側は変化する方向が予測できることになる。

「堀場、フィールディングの練習だ。ピッチャーゴロの処理を徹底的にやる」

ファーストの高橋には、あらかじめ堀場がカーブで送球することを伝えた。

「堀場いくぞ」

佐伯は、ぼてぼてのゴロを三塁側に転がした。堀場はマウンドを降りて、捕球するとファーストに球を投げた。カーブである。すると高橋は難なくキャッチした。その後も、高橋は、堀場の送球をすべて捕球した。

佐伯はガッツポーズをとった。

「高橋どうだった？」

「問題ありません。あれなら捕れます」

「そうか」

「それに、堀場のカーブはそんなに曲がりませんから」

佐伯の予想はあたった。

吉田高校は順調に予選を勝ち進んだ。そしてベストエイトに残った。これまでのところ、堀場の投球は一度もない。それらしいピンチがなかったのだ。実は、堀場の存在が、ピッチャー陣に余裕を与えていた。いざとなったら堀場がいる。この安心感は大きい。

とは言っても、エースの柏葉にも次第に連戦の疲れが見えてきた。山下は、まだ大丈夫そうだが、やはり柏葉に頑張ってもらわないとどうしようもない。

準々決勝の相手は、前年優勝の三田学園である。甲子園では3回戦で惜敗したが、強豪である。吉田高校は、エースの柏葉の活躍で、7回まで相手を無得点に抑えた。しかし、相手のエースも絶好調で、吉田高校はヒット1本に押さえられていた。8回表もすでにツーアウトである。つぎは4番の中田だ。

佐伯は

「中田がなんとかしてくれるかもしれない」

そう思った。ランナーが出た場面で中田につながったかったが、長打が出れば、相手のピッ

チャーも動揺するであろう。

三田学園のエースも中田を警戒している。初球は外角のボールから入ってきた。中田は、ストライクが入ると躊躇なくバットを振ったが、空を切った。しかしツウアウトをとられてからは、しぶとく粘った。ツウアウトからファウルが続いた 10 球目、ピッチャーのコントロールが狂った。ヒットを狙った中田のバットはコンパクトにボールを芯でとらえた。そして、白球はレフトスタンドに消えた。

中田は信じられないという顔をしていたが、しばらくすると右手を上げて味方スタンドの声援に応え、グラウンドを一周した。ついに先制点をとった。しかし、佐伯は安心していなかった。1 点を守ることは実に難しい。

そして、8 回裏にピンチがやってきた。柏葉はツーアウトまで順調に来たが、相手の 2 番打者にフォアボールを与え、つぎのバッターにはレフトとセンターの間にポテンヒットを許した。迎える打者は、今大会当たっている 4 番である。今日の試合でもヒットを 2 本許している。

佐伯は、主審にピッチャー交代を告げた。スタンドは山下の登場を期待したが、佐伯は「ピッチャー堀場」と宣言した。スタンドはざわめいた。堀場という名前を聞いたことがないからだ。今大会は一度も投げていない。

「そんなピッチャーに、こんな大事な場面をまかせていいのか？」

とは言っても、名監督と呼ばれる佐伯の采配だ。

「もしかしたら秘密兵器かもしれない」

スタンドはそんな期待を持った。

しかし、堀場のウォーミングアップで、そんな期待は、もろくもくずれた。

「なんだ、あのもやしみたいなやつは」

「一年生らしいぞ」

「おい、監督は試合を捨てたのか」

スタンドは落胆した。

「なんだ、あの球は」

「あれなら俺だって打てるぞ」

ブーイングの嵐である。

一方、三田学園のベンチは大喜びである。これで逆転できるとみんなが思ったのだ。そして、運命の第一球が放たれた。

堀場の投げた球は、ど真ん中の直球だ。まさに打ってくれといわんばかりの好球である。吉田高校のスタンドからも溜息がもれた。ところが、そのとき、驚くべきことが起こった。三田学園の 4 番が自信をもって振ったバットからは快音は聞かれず、ぼてぼてのゴロがピッチャーの前に転がったのだ。堀場は、捕球すると難なくファーストに送球した。場内はざわついた。いったいなにが起こったのか。その後、吉田高校の応援スタンドから

は歓喜の声が上がった。

「堀場！ナイスピッチング」

吉田高校のナインは、ベンチに戻るときに堀場の肩を叩いて称えた。

9回は山下が抑えた。8回のあまりにも衝撃的な結末に、三田学園のナインはみな元気を失っていた。結局、1対0で吉田高校は辛勝し、準決勝に進んだ。

準決勝の相手は、練習試合で負けた西院高校である。佐伯は、この試合も厳しくなることを覚悟していた。案の上、7回まで無得点を続けたが、8回の表に柏葉がつかまった。エラーも重なり、ノーアウトで満塁となったところで、3番打者にデッドボールを与えてしまった。ついに相手に先取点が入った。もうこれ以上の追加点は許せない。

たまらず、佐伯はピッチャー交代をつげた。

「ピッチャー、堀場！」

また、スタンドがざわめいた。

「山下を出せ」

実績から言えばここは山下だ。前の試合では堀場はブロックで押さえることができたが、さすがに今回はだめだ。誰もがそう思った。

相手は4番だ。まさに絶体絶命である。

堀場がピッチングを始めると、前の試合と同様に、スタンドはため息をついた。

「あれではダメだ」

佐伯は相手のベンチをみた。すると、監督がサインを出した。4番打者は解せないという顔をしている。

そして運命の第一球。

吉田高校の応援スタンドは目をつむった。打ってくれといわんばかりの絶好球だ。

ところが驚くことが起きた。4番打者は球を見送ったのだ。

当然、打者が打つものと思っていたキャッチャーの飯田は油断していた。幸いなことに体で止めようと思っていたので、捕球そこねた球はプロテクターに当たり、下に落ちた。満塁なので誰も動かない。

西院高校の監督がじっと、その様子を見ている。佐伯は少し不安になった。あいつは気がついたのだろうか。

4番打者はつぎの投球も見送った。さすがに飯田はへまをしなかった。ミットと腹でボールをうまく押さえ込んだ。打者は最後までボールを見ている。監督の指示なのだろう。前回の練習試合のときの堀場の投球になにかを感じたのにちがいない。

打者は、監督の方を見ると、頭をたてに振った。

「大丈夫ですよ」

というサインなのだろう。当たり前だ。見るからにヘナチョコボールである。打つなというほうが間違っている。

それに、すでにツーストライクである。ストライクが来たら打つしかない。堀場が投げた三球目も「どうぞ打ってください」というような球だった。

4番打者は自信を持ってバットを振った。吉田高校応援スタンドからは悲鳴に近い声が聞こえた。しかし、そのバットはボールを芯で捉えることができず、3塁前にぼてぼてのゴロが転がった。

西院高校のナインが驚いたのは、吉田高校のサードが、それを予測したようにダッシュしてきていたことだ。そしてキャッチャーの飯田にトスした。すかさず、飯田はセカンドに矢のような送球を送った。4番打者はあっけにとられている。そして、あえなく1塁で憤死した。スタンドも何が起きたか理解できない。めったにないトリプルプレーの成立である。

佐伯は思った。西院高校には動揺が見られる。リードを許しているが、ナインの士気は明らかに吉田高校のほうが上だ。8回の攻撃は、打順よく一番から始まる。佐伯はセーフティーバントのサインを出した。

意表をつかれた西院高校のサードは動きが遅れた。そして間一髪、1塁はセーフとなった。佐伯の作戦はみごとに成功したのだ。2番打者はセオリー通り、送りバントでランナーを2塁に進めた。同点のランナーである。どうやら西院高校のバッテリーは悩んでいる。

1塁を埋めたほうが守りやすい。しかし、その次のバッターは4番の中田だ。ワンアウト1、2塁で中田と対戦するのは避けたい。同点どころか逆転の可能性もある。バッテリーは3番の高橋と勝負することに決めた。ただし、きわどいコースをねらっていく。

高橋は粘った。くさい球はなんとかカットする。そしてツースリーになった8球目に運命の球がやってきた。ピッチャーのコントロールが乱れて、真ん中に直球が来たのだ。高橋は思いっきりバットを振りぬいた。ベンチのみんなが立ち上がった。打球はきれいな弧を描いて、レフトスタンドに突き刺さった。逆転のツーランホームランである。吉田高校はついに逆転した。その後、中田以下の打者は凡退したが、この1点で勝ると佐伯は確信した。

9回の表も堀場に続投させた。この回の攻撃は西院高校にとっては、まさに地獄であったであろう。一見、何でもなし堀場の球を絶好球とばかりに打者は振るのだが、打球はことごとく内野に転がった。結局、たった3球で西院高校の攻撃は終わり、吉田高校の決勝進出が決まった。

柏葉と堀場の活躍で、吉田高校は念願の甲子園出場を果たした。この頃から、堀場のピッチングがマスコミの間で話題となっていた。「まぼろしの魔球」と称する専門家もいる。

佐伯は、練習の合間に大リーグ中継を見ていた。今日は、堀場がデビューする日だ。あの年、吉田高校は甲子園で優勝した。堀場の魔球は、甲子園出場の高校生たちを大いに悩ませた。どうみても平凡な球なのに、打つとことごとく凡退する。

堀場が後ろに控えているという安心感は、柏葉のピッチングの幅を広げた。大胆な攻め

を平気でするようになったのだ。さらに、打撃陣にも変化があらわれた。柏葉と堀場のコンビならば大量点はいらぬ。そして、みんなが協力して1点を狙うようになった。

甲子園初出場の吉田高校は、一回戦で姿をけすだろうと思われていた。それが、大方の予想を裏切って、競合校をつぎつぎと破り、ついに優勝してしまったのだ。すべて堀場のおかげだ。

優勝からほどなくして、佐伯は衝撃の告白を受けた。堀場が高校をやめたいと申し出たのだ。父親が事業に失敗して、多額の借金を抱えているという。奨学金があるということも説明したが、堀場の決意は固かった。家族が苦しんでいる時に、自分だけ遊んでいるわけにはいかないという。

そんな時、佐伯は大リーグのスカウトから連絡を受けた。堀場の事情をすべて知ったうえで、マイナーリーグに堀場を迎えたいという申し出だった。しかも、契約金は破格の一億円という。これだけの金があれば、堀場は家族を救うことができる。

佐伯は、堀場と両親を呼んで相談した。そして、大リーグの要請を受けることにした。苦渋の選択ではあるが、堀場一家を救うには、これしかない。佐伯は大リーグの情報収集能力に驚かされた。実は、日本のプロ球団にも打診したが、いずれからもよい返事はもらえなかった。素材としては面白いが、球速があれだけ遅いのではプロでは通用しない。それが一致した意見であった。

堀場の大リーグ移籍を、マスコミはそれほど大きく取り上げなかった。確かに、甲子園では活躍したが、まだ高校一年生である。むしろ、佐伯の決断を非難する論調が多かった。中には、佐伯は大リーグ側から多額の謝礼を受け取ったなどと根も葉もない噂を記事にする週刊誌もあった。

佐伯は、堀場が通用するには数年かかると思っていた。しかし、堀場はマイナーリーグで大活躍した。チームの監督は、堀場をピンチのリリーフに使った。しかも、打者ひとりで変えた。徹底的な分業方式である。終盤でランナーがたまったら堀場で切り抜ける。この作戦はあたった。そして、半年で大リーグに昇格した。

堀場は、日本で言えば高校二年生である。それが大リーグのマウンドに立つのだ。しかも、ピッチャーになってまだ1年ほどである。

堀場のデビュー登板はあっけなくやってきた。味方が1点差でリードしている9回にワンアウト1、2塁のピンチで登場した。半年ぶりにみる堀場は、体がひとまわり大きくなったような印象を与えた。アメリカの科学野球で鍛えられたにちがいない。

さらに、佐伯が驚いたのは堀場の牽制球だ。かなりはやい。そして、気づいた。シュートを投げているのだ。この短期間のあいだに仕込まれたのだろう。確かに、大リーグのラ

ンナーは足が速い。カーブでけん制していたのでは、走られてしまう。

相手打者は、過去にホームラン王になったこともある強打者だ。二の腕が丸太のように太い。堀場のことをあざ笑っている。ウォーミングアップで見せた堀場の投球をばかにしているのだ。

そして、運命の一球が放たれた。バッターは驚いた。絶好球にもかかわらず、3 塁が前進してきている。「ばかな、けがをするぞ」思いっきりバットを振った。しかし、その前進してきた 3 塁の前にぼてぼてのゴロが転がった。あっという間にダブルプレーが成立し、ゲームセットとなった。味方スタンドは堀場に喝采を送った。マイナーリーグでの堀場の活躍を知っているファンは、これを期待していたのだ。

その後、堀場は大リーグで大活躍した。そして、堀場の魔球は、伝説の魔球になぞらえて「ナチュラル」と呼ばれるようになった。自然に変化する球。自然まかせで、その変化を誰も予測できない球。